

「交流の拡大と新たなライフスタイルから考える魅力ある国づくり」

■パネリスト

佐藤 久美 氏 英文情報誌「アベニューズ」編集長

須田 寛 氏 東海旅客鉄道（株）相談役

マリ クリスティーン 氏

異文化コミュニケーター

愛・地球博広報プロデューサー

■コーディネーター

小出 宣昭 氏 中日新聞社常務取締役編集担当



【小出氏】 中日新聞の小出でございます。今日のコーディネーターを仰せつかりまして、新聞記者というのはいろんな取材の現場で体験するんですけども、僕もこの能舞台の上に上がったのは初めての体験でありまして、なかなか気持ちがいいものだなと思ひまして、これから快適にしゃべれるのではないかというふうに思っております。

今日は、交流というものをこれからどんなふうに考えていったらいいのだろうかというのをこの3人の方々からご意見を伺うと。初めに基調講演でマリさんに、せっかく万博というすばらしい体験の機会が与えられた、この貴重な体験を財産にしない手はないだろうというようなので、この体験をどういうふうに広げていくかというようなお話だったんですけども、まず、最近ではライフスタイルというのが徐々に変わっていると申しますか、例えば私たちの世界では、ある種の新しい時代の2つの階層というのが今まであったんですけども、お金はまあありリッチだけれども時間がないという、キャッシュリッチ・タイムプア。もう一つは、タイムリッチ・キャッシュプアという時間がたくさんあるときにはなぜかお金がないというので、この2つが適度にバランスをとれて

いないとなかなか交流というのは難しいと。キャッシュはなかなかリッチにならないんですけども、タイムリッチでキャッシュも決してプアではない程度の状況にならないかというようにして、一生懸命日本人は今まで働いてきたと思うんですけども、それがようやく、これまでと比べると働いてキャッシュがリッチのうちにはタイムがプアだと。それで、リタイアしてタイムがリッチになると、時間的な余裕が出たと思うと意外とお金がない。老後のことを考えると、旅行なんかできるかというようなのがちょっとだけ変わってきて、タイムリッチで、かつキャッシュもそうプアではないという状況に差しかかったのが今の21世紀ということなんじゃないかと思うんです。

こうした背景をもとにして、暮らし方といいますか、ライフスタイル、人生の過ごし方というのが徐々に変わりつつあるというような感じがするわけです。この時代的背景をバックにして、特に団塊の世代が大量にリタイアするという時代を迎えました。団塊の世代の方々がタイムリッチになろうとしているという、こういう新しいというか、非常に組織された企業人たちがタイムリッチになるという時代に、どのような交流というものが考えられるかということ、まず、須田さんからご意見を伺いたいと思います。

【須田氏】 美しい着物の女性に囲まれておりますと、何となく上がってしまっておりまして、どうもあまり落ちつけないのでございますけれども、交流という問題提起がありました。交流ということを考える場合に、我々はいろんなことを頭に浮かべます。思い浮かべるままに、先ほどもお話がありましたけれども、ふっと考えましたのは、まず21世紀は交

流の世紀だということがよく言われます。20世紀は戦争と対立の世紀だったんだと、21世紀こそぜひ交流の世紀でなきゃいけない、こういうことがよく言われます。

それから、もう一つは、いよいよ人口が減っていくんだと。既に人口が減りつつあるというような統計もございますけれども、その中で、やはり高齢化現象も進むと、お年寄りが増えていく。そうになっていくと、やはり交流というものを盛んにしていかなければ、なかなかこれからの文化は発展しないんじゃないか、こういう問題提起もあります。

さらに、これからは物の時代ではなしに心の時代なんだと。心の時代というのは、お互いの人と人との触れ合いというものから生まれていくんじゃないか、こんなようないろんなことを私どもは頭に浮かべます。



いずれにいたしましても、今のようなことから考えてまいりますと、これから人口が減っていくということが大きな1つの命題としてあるだろうと思います、同時に高齢化が進むわけではありますが。そういうところで交流というのは一体どういう意味を持つんだろうかという1つ問題提起がそこにあるだろうと思います。

人が減るとどうなるのでしょうか。定住人口が減ってまいります。今まで町の格を考える際に、東京、大阪、名古屋というふうな町の順番を考える際に人口の順番で考えておりました。人口の多い町のほうが何となく偉いということで考えていたんですが、これからは、そのような定住人口、何人の人がそこに住民登録をしているかということよりも、何人の人がそこで触れ合うのか、そういったことが非常に価値の高い時代が出てくると思います。

東京の丸の内1丁目は、定住人口はほんの数名しかいない

そうです。昼間、100万人ぐらいの人があそこで交流をいたします。だから、あそこは町としての価値が非常に高い。そういうことがこれから全国的にやってまいりますと、果たしてその町に何人の人が来て触れ合うのだろうかかと、そういうことがこれから大きな1つの問題点になってくるだろうというふうに思います。

特に、人口が減りますと、交流をしないと文化が発展をいたしません。今まで1人の人が10人と仮に触れ合っていたといたしますれば、仮に20人の人と触れ合うことができれば、これは人口が減っても触れ合いのチャンスは変わりません。そうすると、そこにやはり文化が発展をする。これから交流社会をつくる場合に、触れ合いのチャンスが増えるということとは非常に大事なことでないかというふうに思います。

それから、人口が減ってきたり、高齢化が進んでまいりますと、そこでどうしても新しいライフスタイル、生活様式というものがそこに必要になってまいります。何か新生活運動ともいうような新しい生活様式を考えなければ、これから人口が減っていくと乗り切っていけない。つまり、働き手がどんどん減っていくということでありますから、高齢化と人口減少が進むということでありますから、人手に依存しておった社会というのはもはや成り立たない。その場合、どういう社会を構成していかなくちゃいけないのか、その中で、我々はどのような生活様式と申しますか、ライフスタイルが要るんだろうか、そんなことがそこに1つ出てくると思うのであります。

よく団塊の世代というふうに申し上げておりますが、私よりうんと若い世代でございますけれども、そういった方々が定年になって、これからどんどん団塊の世代の方々が元気なお年寄りの仲間入りをしつつある。そういうふうな状況の中で、これからの社会は一体どうなるんだろうかということを考えてまいりますと、いろんな問題がそこに浮かんでまいります。どうも私は、そういった交流社会の1つの生活の方式として交流社会というものをつくり上げて、人口が減少する、そしてまた高齢化が進むこれからの社会というものを構成する場合に、観光ということがそこで何かキーワードになってくるような気がしてなりません。観光であります。

観光というのは、読んで字のごとく、その国、地域のすぐ

れたものを心を込めて見る、あるいは心を込めて見てもらうというのが観光でございまして、人的交流がいかに大切なことであるかということをお話している言葉でございます。ただ、その観光にも幾つかの展開がありまして、適切な観光をしなければ交流社会の中でふさわしいライフスタイルはできていきません。どんなものがあるでしょうか。それをちょっと考えてみたいと思います。

1つは、とにかく人々の触れ合い、行き来を何とかして増やしたいとき、一番いい方法は観光です。ビジネスでも人々は触れ合います。いろんな個人の私用でも人々は触れ合うわけでございますけれども、観光ということで大勢の人々がまとまって触れ合うチャンスが生まれる。そういうことございますから、交流を盛んにするためには観光が一番大切な方法です。

同時に、またそれは元気なお年寄りのニーズを満たすことにもなります。定年を終えられて、それから子育てを終えられた方々、平均寿命が延びておりますから、数十年にわたる自由になる時間をお持ちになって、そして一定のお金もお持ちになっていて、そして何か有益にその時間を過ごしたいという方が大勢いらっしゃるんですね。そういう方々のおやりになりたいことは観光なんです。どういうふうな旅行をご提供申し上げたいかということがそこから出てくると思うのですが、ここにも新しいライフスタイルとして観光の定着という問題が出てくると思います。

もう一つは、今度はお年寄りについてはもっと働きたいという方もいらっしゃると思います。また、働いていただかなければ人手不足の時代は乗り切れません。お年寄りに肉体労働をせよといっても、これは無理でありますから、そういうお年寄りをたくさん雇うことができるというのは、観光のマーケットしかほかにはないだろうと思います。観光は、ガイドにしても、通訳にしても、あるいはいろんなサービス業にいたしましても、お年寄りでもやっていただける、いろんな方を雇うことができる1つの生活の場ではないかと思えます。

現に、今400万人の人が日本では観光に従事していると言われておりますが、これは、これからもますます増やしていくことは可能だろうと思います、マーケットが広がるわけありますから。そういたしますと、そういう観光というのは、

今までの観光ではだめなんだと。何か新しい、人手不足時代の21世紀の時代にふさわしい観光というものをやらなければ、今のニーズは満たせないということになってまいります。

そこで、どんな観光がそこに必要かということになってくるわけでございますけれども、1つは、観光というものの幅を広げまして、今までは単にきれいなものを見るときか、歴史的なものを観賞するとかということが観光であったわけでございますけれども、これからは、物を見るだけではなくに、いろんなことを体験してみる、いろんなことを観光でやってみる、それから、いろんなものを自分で勉強してみる、勉強しながら観光する。京都や奈良に行く場合でも、いろんな文化講座を聞いたりして予備知識を持って行く。そうすると、今までの物が違って見えるわけでありましてけれども、そういう体験学習観光ということが1つの大きなニーズとして出てまいります。

今までの観光と申しますと、日帰りとか、せいぜい1泊ぐらい、ばさばさっと自分で身の周りを車で回るとというのが観光でありますけれども、これは一過性の観光で定着した観光ではありません。これから休暇の問題もいろいろ出てまいりますので、長期定住型と申しますか、2泊3日、3泊4日あるいは1週間ぐらいまとめて休みをとることが出てまいりますし、お年寄りは年中休みでございますから、そういう方々はいつでも長い滞在の旅行ができます。場合によっては、将来、観光地に定住をする、そんなところまで進んでいく観光というのがあるんじゃないでしょうか。そういった新しいいろんなメニューを用意すること、そういったことも、これからの観光について必要になってまいります。

そして、多くの方が観光に行くということは、もちろん外国にも行くでありましようけれども、いわゆるリピーターが増えるということですね。反復して同じところへ行く方が増えてくる。その場合に、同じものであったのでは興味がわきませんので、今までの観光地を見方を変えて見ていくことが必要になってくると思います。

そこで、同じ観光地でも違った角度から見るために、テーマ別の観光といったものが出てくるだろうと思います。先ほどもお話が出ておりましたけれども、私どもがいつも提唱しております産業観光、物づくりの観光ですね。それから、街

道観光、道というものからいろんなものを見ていったら一体どうなるだろうか。都市観光、これも町の観光でありますけれども、町の何とかではなしに、町全体の醸し出す1つの雰囲気、その町の空気、そういったものを見る。例えば名古屋駅の周辺と栄の周辺と大須の電気街を結んだあの地域、都心地域、あの中で醸し出される若者向けの情報価値、そういうものを探るような都市そのものの観光というものもいろいろ出てくるだろうと思うのであります。

そんなことを考えながら、これから年齢別に、あるいは外国の方々をお呼びする場合には、場合によれば、その方々の出身の国別にいろんなメニューを用意して、あらゆる組み合わせの観光が行われる。同じような方向にまとまっていくのでなしに、いろんな方向に網の目のごとく人々が動く。そして、あらゆる人とそこで交流をしていく。その中から新しい文化が生まれる。そして、その中から元気なお年寄り等が充実した時間をおとりになることができる。そして、それが結果的には国づくりにつながる、美しい国づくりでございますね。そういうふうにやりながら、新しいライフスタイルというものが定着をする中から新しい国づくりができるように、その方向を誘導するためにこれからの観光のあり方がいろいろ考えられてくると私は思います。

したがって、要約をいたしますと、これから交流の世紀を迎えて、人口の減少、高齢化時代、ゆとりを求めるこれからの社会というものを考えました場合に、人々の触れ合いのチャンスができるだけ増やす。そして、高齢化時代に対しての新しいライフスタイルを考えていく。その中のキーワードは観光なんだと。観光のやり方もこれまでどおりではなしに、体験学習観光を含めた幅の広いものにする。同じ観光資源を違う角度から見るテーマ別の観光、産業、街道、都市等の観光をやる。そして、充実した人々の触れ合いをそこに生んでいく、そして高齢者雇用も進む。それが新しい国づくりにつながる。そんなところがこれからの交流の役割ではないかと思えますし、また、新しい時代の交流のあり方ではないかと思えます。

ありがとうございました。

【小出氏】 ありがとうございました。

ただいまのお話で、体験学習観光といえますか、例えば、我々もしょっちゅう思うんですけれども、海外旅行か何かをして、名所旧跡というのは大体数年たったらすっかり忘れちゃうんですけれども、失敗した体験といえますか、言葉が通じなかったとか、財布をとられたとか、そういう体験は一生忘れないんですね。人生というのは思い出の集積なものですから、体験学習というのはそういう観光だと思うんですね。

それは、先ほども言われましたけれども、現在の旅の主流というのはツアーという、周遊ですね。だから、何月何日どこで飯を食うまで決まっちゃっておるわけです。もともと旅はトラベルというので、トラベルは、語源はトラベイルという、子供を産むときの陣痛といえますか、だから、ものすごい苦しみだけれども、最後に喜びがある苦しみという、トラベイルという言葉がトラベルに発達したんです。だから、もともと旅の原義というのは、そういういろんな失敗をしたり、体験したり、それで最後に喜ぶというすばらしい出会いがあるというような、あらかじめ計画をそもぎっちり決めないような、それで自分で決めて旅立つというようなお話ではないかというふうに思うんですけれども。

これからの時代というのは、まさにそういう旅をして、ただ難しいのは、旅と酒だけは、どこへ行くか、何を飲むかじゃなくて、だれと行くかが一番大事なんですよ。だから、すばらしいところでも憎たらしいおやじと行っても全然おもしろくないとか、それは旅に出るまでの地域の交流というものすごく大事だと思うんですけれども。

それじゃ、次に、佐藤久美さんに、国際交流という大きな問題も非常に大事ですけれども、私は、団塊の世代が定年になりますと、団塊の世代の方々は、これまでの地域活動というのはほとんど女性が中心でありまして、私たち新聞人から見ると、地域にとって女性というのは全日制市民なんですね、主婦は。それで、父ちゃんというのは定時制市民なんです。だから、仕事に行っていて、夜、定時制で帰ってくるだけだから、地域問題にほとんど男性が加わらない。それで、地域問題をほとんど女性の全日制の方々がやっていると。せいぜい男性だと、地域の商店街の方とか昔からの地域ボスの人とかというぐらいで、あとはほとんど女性だったんですけど、

これが大量に団塊の世代の方々地域に入るといって、この人々はビジネスの世界で世界を飛び回った人もいっぱいある。それから、実務として組織を経験した人々ばかりですから、地域問題とか交流をどうするかということを実務として機関車のようになっていくような気がするんですけども、そういう部分から、地域における、例えば国際交流の話になると、地域住民が、現実にあっちにも行った、こっちにも行った、体験がある人たちが軍団として入ると、これは多分日本史上初めての経験だと思うんですけども、そういう点から見て、まず、そのあたりからの国際的な交流とか、それからさらに大きい問題というふうに語っていただければ非常にありがたいんですけど、よろしくお願いします。



【佐藤氏】 わかりました。こんにちは。皆さん、佐藤久美でございます。

マリ・クリスティーヌさんが、愛・地球博の期間中には、行列をして待っている人の中ですてきな交流が生まれていた、というお話をされましたが、本当にいろいろなところで交流の輪がひろがったということをいまさらながらに思い出しました。今日もこの会場には万博に「はまっちゃった」という人たちが何人かいらっしゃるんじゃないかなと思います。2,200万人が万博会場に行ったんですよね。どうしてそんなにたくさんの方が行ったのかなと思いますけれども、やはり万博会場へ行けば世界が見える、世界の文化を学ぶことができる、そして世界の人たちと交流ができる、その一言だったと思うんですね。そして、その学んだ世界をどうやって広げていくかということがこれからの愛知県に求められていることだと思います。

さて、万博には120の国が参加したわけですね。愛知県内

の名古屋市を除く全市町村が、参加国のホームシティ、ホームタウンとして、地域を挙げてホスピタリティあふれた公式参加国の受入れをして、博覧会を盛り上げ、さらには草の根の交流を含めて幅広く国際交流の推進を図っていこうという、「一市町村一国フレンドシップ事業」というプロジェクトがありました。この会場にいらっしゃっているほとんどの方がその一市町村一国フレンドシップ事業を知っていらっしゃると思うんですけども、私がこの企画を聞ききましたときに、大変おもしろい、壮大なプロジェクトだと思いました。

そして、それぞれの地域で交流が生まれるのであれば、それは記録として残しておくべきだ、それも映像という形で記録をしておけばみんなが楽しめるものになるというふうに思いました。その記録映像も、例えば記録映像制作会社が制作すると、きちんとした、でも、どちらかという当たり前のものができちゃうと思うんですけども、私たちの企画では、そのフレンドシップ事業の相手の国から、映画監督とカメラマンをその各地域に招聘して、滞在は3週間ホームステイをしてもらう。その間に記録の映画を撮ってもらうというものでした。この企画提案を愛知県の国際博推進局に持ち込みましたら、ある担当者の方からは、「佐藤さん、そんなことできっこないよ。とんでもない変な映画ができちゃったらどうするんだ」、などと言われちゃったんですけども、それでも、その国際博推進局の方が愛知県内の全市町村に声をかけてくださいました。その結果、豊橋市をはじめとする19の市や町が私のところがやりましょうというふうに手を挙げてくれたんですね。豊橋市は三つのフレンドシップ相手国、ホンジュラス、リトアニア、ベネズエラから映画監督を呼ぶことに決めてくれました。

豊橋市長が実行委員長となって、十九の市町で実行委員会が作られ、私たちは運営事務局として働きました。私たちの仕事は、まず、19の市町の相手国21カ国から映画監督とカメラマンをみつけることから始まりました。私はほんとうに見つかるのかしらと実は思ったんですが、確かにキューバとかホンジュラスの監督を探すのに時間がかかったんですが、無事見つけることができました。世界中には映画を撮りたいと思っている人たちがたくさんいるんだということを実感しました。オランダ、韓国やインドなどは、たくさんの映画監督

がエントリーしてくれて、選ぶのに困ってしまったというところもありました。

万博期間中に21カ国の監督とカメラマンが続々と愛知県入りしました。私はほとんどすべての映画監督を中部国際空港で出迎えたわけです。そうすると、遠い国からやってくるわけですから、みんなへとへと、疲れている。初めて来る日本、それから3週間で1本の映画を撮れるのかしらというふうに、彼らは心臓をドキドキさせながら緊張していた面持ちであられました。

それぞれの各市町に送り届けて、それからしばらくして、この監督はちゃんと映画をつくっているかなと私が見に行きますと、みんなはすごいにこにこして、とてもリラックスした雰囲気なんですね。それは、各地域の人たちがとても温かく迎えてくれた、ホストファミリーの人たちもおいしいお料理をつくってくれたり、体の調子に気遣ってくれたりして温かくもてなしてくれたからなんですね。滞在を楽しみ、こないところはないよと話をしながら、仕事を進めていました。ところが、だんだん帰国が近づいてきますと、編集作業というとても厳しいハードな仕事が出ていて、また疲れてくる。

そして、いざ帰国が迫ると、「僕、帰りたくない、もっと日本にいたいので、チケットの帰りの日にちを変えてください」というようなリクエストがどんどん入ってくるんですね。そうもいきませんので、編集作業をせかしたり、帰国を促したりしました。空港で見送るときには、ホストファミリーや市町の担当者と抱き合っ、涙、涙、涙だったんですね。3週間で1本の映画をつくるなんていうことはほとんど考えられないぐらいハードな仕事だったそうなんですけれども、ハ



ードな仕事の中で、彼らは滞在やその体験を楽しんでくれたわけです。

そうやって無事21本の映画ができあがりました。ぜひ、また皆さんにも機会があったら見ていただきたいと思います。万博期間中の2005年の9月13日から15日に、エキスポホールで上映したんですけれども、来場者の皆さんには、とても楽しんでいただきました。外国人の見た不思議な日本も描かれています。例えばチュニジアの映画監督は瀬戸に滞在したんですけれども、彼はウナギ屋さんを登場させています。ウナギ屋さんへ行くと、いっぱい生きたウナギがよろよろ動いていて、それをつかまえて、包丁で料理をして、くしを刺して焼いて、それを小さなかわいい女の子がぱくぱくおいしそうに食べているなんていうところが映像に入っていたりとか、駅で日本人がたくさんマスクをして一生懸命忙しそうに歩いている。マスクをしている日本人というのがちょっと不思議に映るとか、あるいは町の中にいっぱい電柱がありますよね。あの電柱なんかが大写しになっていたり、あとはラブホテルのネオンとかが強調されていたりとか。外国人の目には、こんなふうに日本の異文化というのが見えるんだなということもわかります。

また、グランプリをとったベネズエラの女性映画監督なんですが、豊橋市に滞在して1本の映画を撮りました。皆さん、豊橋市とベネズエラってほんとうに地球の全然反対の方向にありますよね。彼女はベネズエラと豊橋市で行われるお祭りに注目して、こんなに2つの地域は遠いけれども、お祭りにはこんなに似ているよ、文化にはこんな共通したものがあるよというものを描いてくれました。このように、さまざまに21本の映画ができました。私は、彼らがうまく映画が撮れたのは、地域の人たちが温かく彼らをほんとうにホスピタリティーで迎えてくれたこと以外にないと思います。

その21本の映画なんですが、私のところにディスクがありますので、もしご用命があればおっしゃっていただきたいと思います。各監督、21カ国の映画監督たち、たとえば、ドイツ、オランダ、ベルギー、ラオス、ペルー、ポーランド、ホンジュラス、リトアニア、カンボジア、などの監督たちは、みんな自分の国へ帰って上映をしてくれています。自分は日本という国で映画を1本撮ったんだ。その日本の中の愛知県

で万博があって、自分は国を代表する監督として、その万博の映像を制作したんだよと言ってくれていると思います。

その国で映画を見る人たちも、多分日本のことなど考えたことがない人たちがほとんどだと思うんですけども、その映像を通して、日本との距離がぐっと縮まったと思います。たとえば、カンボジアの人々は、映像の中の幸田町の人々や子供たちの笑顔にきっと親近感をもってきていることでしょう。そして、この映画監督たちの中には、何と、実際に再来日して、ホストファミリーを訪ねたり、映画を撮っている人たちもいます。また、自分のところにホームステイをした監督のところを訪ねていったホストファミリーも何人かいます。ベルギーに行ってきたよ、チュニジアに行ってきたよ、リトアニアに行ってきたよというふうに言ってくれるのがとてもうれしいんですけども、そうやって一つのことをみんなで作るという共同作業を通して交流が深まり、それが観光につながっていくのではないかなというふうに私の体験を通して考えております。

【小出氏】 ありがとうございます。

すばらしい話だと思いますね。例えば私の新聞社にも、よく外国のジャーナリストが、ちょうど昨日からはパレスチナのジャーナリストが来まして、これから2週間、日本の新聞社を勉強するという、フォーリン・プレスセンターという外務省の外郭団体から割り当てた。それで、彼と昨日話してまして、彼はアメリカにも行ったことがあるんですけども、日本は初めてだと言うんですね。どうだと言ったら、やっぱりすごく親切だと言うんですね。ほんとうに親切な国と。だって、アメリカだって親切じゃないかと言ったら、アメリカの場合は、高いレストランへ行くともうすごく親切だ。すごい安いところへ行くと実におっきらぼう。これは、豊かな世界と貧しい世界で親切の度合いが全然違う。自分たちは貧しいところばかりへ行っているから。それでも、日本に来たら、貧しいところへ行っても、みんながにこにこ親切にしてくれる。感動したと言うんですね。

だから、僕は、これは日本人が持っているすばらしい特性だと思って、どっちかという、僕らは出張旅費をごまかして高いところへ行くケースが多いものですから親切だなと思

うんですよ。でも、やっぱりほんとうに貧しい大衆料理屋とかというところへ行っても親切だというのは、パレスチナの人にとっては感動的なんですね。まして、ジャーナリストだから、彼は国に帰ってそういうことを書くわけですから。そのぐらいホスピタリティーというのは大事だと思ったんですね。私も全く同じ体験をしましたね。

日本人というのは国際的じゃないと言われてはいますがけれども、とんでもない。国際性というのは心の問題だから、その心はほんとうにすごい国際的な値打ちを持っておると僕は思うし、それからもっと感じるのは、例えば私たちは欧米のジャーナリストなんかと会うと、僕は、日本地図を描いてくれと必ず言うんですね。ほとんどの人は描けないんですよ。中国の記者も描けませんね。それで描いてもらうと、ほとんど朝鮮半島が2本あったり、フィリピンみたいに丸をいっぱい描いたり、日本の地図が描けないんです。これは当たり前で、僕らが、それじゃ、ホンジュラスの地図を描けるかといったら描けないのと同じなんです。

だから、私たちは、欧米と中国からはいろんなことを学んだから、欧米と中国についての地図はいっぱい描けるんですけども、欧米と中国の人たちは、日本から学んだ歴史というのはほとんどないものだから日本地図を描けないんですよ。そのぐらいやはり日本に対する認識は、これはマスコミュニケーションギャップというんですけど、しょうがないですね。怒っても、ひっくり返しようがない歴史的現実なんです。

そういう状況の中で、彼らに日本はすばらしいと思わせるのは、そういう心の問題だという感じがします。というので、マリさん、マリさんの場合は日本人なんだろうけれども、何人かわからんような感じがするんですけども、いろんな国で住んで、やっぱり日本が一番いいでしょう。そういう話と違って、世界的な交流と、それから環境の問題ということについて、まずお話ししていただきたいと思うんですけども。

【クリスティーヌ氏】 愛・地球博に来られた方々、今、佐藤さんからも話がありましたように、国によって違うんですね。先進国の方々にしてみると、分別というのは2種類ぐらいしかない。海外、例えば発展途上国の方ですと、ほとんど全部一緒にひっくるめて捨ててしまうというふうな感じが